

実習報告（基盤実習）

## 生徒が学ぶ意義をもつ歴史総合の授業開発 －状況学習論をアプローチとして－

中村 明純（授業実践探究コース）

### 【探究実習のテーマと設定の理由】

本研究の「歴史を学ぶ意義」とは、「現在と歴史を往復することによって、現在をより理解することができる、または将来への指針を考えることができる」と定義する。しかし、高等学校学習指導要領解説地理歴史編「第2節 地理歴史科改定の趣旨及び要点」では、「主体的に社会の形成に参加しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成などが不十分であること」が指摘されている。このような課題があがる背景として、授業者が生徒の大学入試に向けて、知識を習得するための授業を中心に行っていることがあげられる。

暗記中心的な学習から脱し、公民としての資質・能力の育成を目指した授業実践について、佐賀県の社会科教育では佐賀大学教職大学院、佐賀大学教育学部附属小中学校社会科部会を中心に「状況学習論」「正統的周辺参加論」をアプローチとした授業開発が行われている。また、本研究で実践する「歴史総合」について、2022年度4月から高等学校において実施されており、実践例が少ないという現状がある。

本稿では、既に行われている状況学習論、正統的周辺参加論をアプローチとした授業実践の課題点を改善しつつ、「歴史総合」という新たな科目において、生徒が学ぶ意義をもつ状況学習論をアプローチとした授業開発を行う。

### 【探究実習の研究目標】

- ① 研究授業①を実践し、生徒にとって学ぶ意義のある歴史総合の授業を実現する。
- ② 研究授業①を通して、現時点での成果と課題について明らかにし、次年度の研究授業②で生かせるようにする。

### 【探究実習の概要】

実習校である佐賀県立S高等学校は、生徒在籍数について1学級約40人在籍しており、1学年に7学級あるため、全校生徒数も多い。生徒の進路について、4年制大学へ進学希望する生徒が多く、短期大学や専門学校、就職を希望する生徒も在籍している。基盤実習について9月12日から10月4日まで計11日間の集中実習、10月25日から1月24日まで毎週火曜日に9日間の実習を行った。前半の11日間について、1年時に履修する歴史総合を1年生2クラスにおいて各6時間ずつ計12時間の研究授業を行った。研究授業の内容について、「歴史総合 第I部 第2章 2 アメリカ独立革命とフランス革命」において、人権をテーマにした授業を行った。授業前に生徒へアンケートを取り、生徒が関心をもっている人権問題について調査し、その結果と現代社会の状況、学習内容を照らし合わせて単元の最後の授業で扱う人権問題を決定した。

## 【探究実習の成果と課題】

本研究授業の成果について、2点あげる。第一に、アンケートにおいて生徒が研究授業前と比べて「歴史の学びは役に立つ」という回答が多く見られたことである。本実践において、歴史と現代社会の問題を直接結びつけるのではなく、歴史的事象と、現代社会の問題において類似している点を意識し、授業でも強調して扱った。具体的には、アメリカ独立宣言・フランス人権宣言と革命後の実態、世界人権宣言と現代のジェンダー問題について、比較対象として取り上げた。アメリカ独立革命・フランス革命と現代とのつながりをより実感させるために、時間の都合上簡潔ではあったが「フランス革命時の女性観」「女性の参政権の獲得までの過程」の2点を取り上げた。成果として、「歴史の授業は役に立つ」と答えた生徒は事前アンケートでは45%、事後アンケートでは85%という結果であり、*t*検定の結果についても有意差が見られたため、成果があったと考えられる。第二に、歴史的な見方・考え方を働かせるための場面や時間の設定の必然性が明らかになったことである。理由としてアンケートでは結果が見られたものの、6時間目の生徒のワークシートの記述からは歴史を学ぶ意義や有用性について理解しているかどうか判断することができなかつたためである。詳細について、授業実践の課題にて述べる。

本研究授業の課題について、2点あげる。第一に、取り上げた現代の問題について、生徒が自分事として考えることができていない点である。扱った人権問題について「世界のジェンダーギャップ指数ランキング(2022)の日本の順位を踏まえて、今後日本はどのようにしたら良いと思いますか。」という問いについてグループで議論した。その結果、主に「女性の議員を増やす」「偏見をなくす」「女性の意見をもっと取り入れる」等、「共同体の外」からの意見がほとんどであった。どのようにしたら女性の意見をもっと取り入れられるのか、男性の立場はどのように考慮するのか等、検討しなければならない課題は多くある。しかしながら議論の時間について15分程度と短かつたこともあり、自分事として考えるまでにはもう少し授業者の手立てが必要であったと考えられる。第二に、本当に歴史を学ぶ意義について生徒が実感しているかについて、明確にできていない点である。アンケートについて「歴史の授業は役に立つ」と答えた生徒は多くいたが、その根拠を授業中やワークシートから見る事ができていない。アメリカ独立革命とフランス革命が起きた時代から現代までのつながりについて、授業者がその間の歴史的事実を簡潔に提示したこともあり、アンケートからも歴史と現代はつながっていると回答した生徒は多くいた。しかし現代の問題について考察する際は、授業で生徒自身が学んだ歴史的内容とつなげる機会がなかつた。今回の研究授業において、歴史的な見方・考え方を働かせて現代の問題について生徒が考える場面を設定することができなかつた。この点を改善することによって、生徒の歴史を学ぶ意義や有用性について、より確かなものにする事ができるのではないだろうか。また、現代の問題について、歴史的な見方・考え方を踏まえて考察することで、より生徒が市民社会という共同体の周辺から参加することにつながるのではないか。

## 引用参考文献

- ・ジーン・レイヴ, エティエヌ・ウェンガー (訳・佐伯胖), 1993, 『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』, 産業図書.
- ・キース・C・バートン, リンダ・S・レヴスティック (訳・渡部竜也, 草原和博, 田口紘子, 田中伸), 2015, 『コモン・グッドのための歴史教育 社会文化的アプローチ』春風社.
- ・佐長健司, 2015, 「市民的変容のダブル・バインドー正統的周辺参加におけるコンテキストの学習ー」  
J. Fac. Edu. Saga Univ. Vol. 20, No. 1 : 63-74.